

目隠し姫と鉄仮面



登場人物
紹介

▲ ノルマン・
トレーズ

フィオナの父親で、
トレーズ商会の会長。
娘達を可愛がる優しい
人。

▲ レティシア・
トレーズ

フィオナの継母。
彼女の一言がフィオ
ナのトラウマになった
というが――

▲ ライナス・
ロンドリネ

フィオナの見合い相手。
性格に難ありのお坊
ちゃん。

▲ ハンス・
レイブンス

元気で明るい警備団
の新入り。
ロベルトやハーシェル
を慕う。

▲ ハーシェル・
クレスシェン・
ウォルトホル

街のイケメン警備団団長。
女性達の憧れの的。

▲ アイシス・
トレーズ

フィオナの妹で重度
のシスコン。
美少女だが、性格は
男勝り。

▲ ロベルト・アスレイル

24歳。街の警備団副団長を
務める。
あまりの仏頂面から「鉄仮面」
と呼ばれるが、本当は心優し
い真面目な青年。

▲ フィオナ・トレーズ

18歳。過去の出来事から
自分を醜いと思い込み、以
来前髪で顔を隠す。
そのため、ついたあだ名が
「目隠し姫」。

目次

序章	7
一章 目隠し姫と鉄仮面	9
二章 春の女神は苛烈 <small>かれつ</small> に笑う	136
三章 幸せの在り処 <small>あ</small>	169
四章 幸せを運ぶ花嫁パレード	211
五章 ありのまま、共に歩む未来へ	253

序章

「その顔を見せないでちょうだい！」

継母継母がそうわめくようになったのは、フィオナが七歳になった頃だった。

フィオナが四歳の時に実母は亡くなった。その半年後に、父が子どものためにと再婚した新しい母は、とても美しい人だった。太陽の日差しのように輝く金髪に、夏の日の新緑を思わせる緑色の目。その健康的な美しさは、彼女をより輝かせていた。継母の連れ子である、フィオナの二つ年下のアイシスも母親似でとびきり可愛かった。

それでフィオナは思ったのだ。

——私は相当醜みにくい顔をしているのだろう。だから、お母さんは私の顔を嫌がるのだ。

それ以来、フィオナは前髪を伸ばして顔を隠すようになった。

義妹は可愛らしい人形のように。姉は不細工。

フィオナの夢は幸せな花嫁さんになることだったが、これでは誰もお嫁にもらってくれないと思

い哀しくなった。

だが、それはそれで仕方がない。世の中そんなに上手く回るものではないと、商人である父はよく言っている。

だからフィオナは結婚を諦めて、一人でも生きていけるように勉強や商売の手伝いに勤しんだ。もちろん、家事も覚えた。

これで大丈夫。これなら、一人でも生きていける。

でも、もし小さな希望を抱いても構わないなら——どこかに自分みたいな醜い女をもらってくれる物好きな殿方が一人くらいいいものだろうか。

フィオナは夜空の星に願いを吹き、今日も針仕事に励むのだった。

一章 目隠し姫と鉄仮面

「すっごく素敵なのよ、ハーシエル様って。ああ、一度でいいからお話ししてみたいわ！」

妹のアイシスは、今日も針仕事に精を出しているフィオナの部屋にやって来て、いつものように椅子に座るなり、溜息混じりに呟いた。

「そうなの」

フィオナがそう答えるのもいつものことだったが、アイシスは話を聞いてくれれば満足なのか、気にせず続ける。

「あの太陽も真っ青になるほど見事な金色の髪に、空みたい澄んだ青い瞳。背も高くていらっしやるし、剣の腕も素晴らしいと聞くわ。あんな方がこの街の警備団の団長様だなんて、私、とってもついでるわ！」

妹が恋する御方は、フィオナ達が暮らす街メリーハドソンの警備団の団長だ。ウォルトホル領主家の次男にして、容姿端麗で明るく社交的なハーシエル・クレスシェン・ウォルトホルは、二十四歳と若く、しかも独身ということもあって、街の——いや、領内の若い娘達の憧れの的だ。長男ではないので、将来は貴族の家に婿入りすることも、市井の娘と結婚して穏やかに暮らすことも出来る。平民の娘達が騒ぐのも無理はないだろう。なにせ、手の届くところにそんな素敵な人がいるの

だから。

「でも、あの方はしょっちゅう誰かとお付き合いしていると聞いわ。アイシスなら上手くいくかもしれないけれど……あなたを大事にしてくれない方は、姉さん嫌よ」

フィオナが静かな声でそつと言うと、アイシスは頬をうつすらと赤らめた。

「そんな風に言ってくれるの、姉さんだけよ。母さんなんて、いい歳して夢見るのはやめなさいって言うの。私、まだ十六よ？ 夢見ていいと思わない!？」

つーんと唇を尖らせる仕草をしても、アイシスの可憐さは損なわれない。それどころか、より一層可愛らしく見える。

そう、アイシスは姉の目から見てもかなりの美人なのだ。

フィオナより二つ年下の、義理の妹。フィオナが物心がつくつかないかという頃に家族になつたので、本当の姉妹のように仲が良い。アイシスは妹ということもあって少しばかりわがままだが、天真爛漫な性格なので付き合いやすい。まあ、わがままといっても自室を改造したいというささやかなものだし、むしろ、ちよつとしたことなら喜んで聞いてあげたくなるくらいだ。

(私みたいな醜い姉にはもつたない妹だわ)

フィオナはちらりと自室の隅に目を向ける。そこに置いてある姿見には、鼻まで前髪を伸ばし、顔の上半分が見えない女が映っていた。あまりに醜い顔なので、前髪を伸ばして顔を隠しているのだ。緩やかに波打つ長い黒髪は艶やかだが、長い前髪が逆に彼女を薄暗く見せてしまっていた。着ている服も灰色で、夏だというのに薄地の長袖を着て肌を隠している。唯一色があるのは、作業用

の緑のエプロンくらいだ。

「アイシスったら。そんなこと言わないで。結婚適齢期ですもの、大事な娘を早く嫁がせたいんでしよう。私にもらい手がない分、ね」

やんわりと微笑んで言うと、アイシスはむすつとむくれた。

「うるさい娘を追い出したい、の間違いじゃないの？ それに姉さん、そんな言い方しないで。見る目のない男達のことなんか放っておきなさいよ。それこそ、あいつらに姉さんほもつたないわこの間の奴のことはもう、ほんつと腹立つちゃって！ 私、あいつの帰り際に、濡れた雑巾を背中に投げつけてやったわよっ」

「……アイシス」

妹はどうも癩癩持ちのようで、時々感情のままに動くところがある。その辺は義理の母にそっくりだ。

しかし、まさかこの前のフィオナのお見合い相手に無礼を働いたとは。道理で、先方から怒り狂った断り状が送りつけられてきたわけだ。

「だってだって、あの人、『これが噂の醜い目隠し姫さまか』って言うのよ？ あいつが姉さんの何を知ってるって言うの。ああもう、ぐしゃぐしゃにして踏んづけてやりたいわ！」

思い出したらますます腹立たしくなってきたのか、アイシスはスカートをぐしゃぐしゃと手で握りしめた。

「アイシス、皺になるからやめなさい。そんな風に言ってくれるのは、それこそあなただけよ？」

第一、本当のことなんだから、気にしなくていいのに」

「いいえ、駄目よ！ 姉さんの相手は、姉さんをうんつと幸せにしてくれる男の人でなくっちゃ。あ、もちろん、私の相手だって、私と幸せに生きてくれる人でなきゃ駄目ね」

にこつと明るい緑の目を緩ませて微笑むアイシスは、愛らしい春の女神のようだ。「幸せにしてくれる」ではなく、「一緒に幸せに生きる」と言うあたりに、アイシスの前向きな性格が滲み出ている。

まあ、結婚を端から諦めているフィオナにとっては、アイシスにムキになられても困ってしまうのだが。

アイシスには悪いが、フィオナはとつこの昔に一人で生きていく覚悟を決めている。

(そんな人、一人でもいたら奇跡だと思うわ)

フィオナは心の内でそつと溜息を零した。

その日の午後、フィオナは街に買い物に出かけた。

フィオナの父ノルマン・トレーズは、トレーズ商会という、この近隣では有力な布地商を営んでいた。屋号に家名が付いているのは、フィオナの祖父が創業したからだ。フィオナは商売の手伝いの一つとして、見本用の衣服やハンカチなどを作る仕事をしていた。加えて、家事の手伝いもすっかりやっている。食事の用意は母と姉妹で当番制にしている、今日はフィオナの当番日だった。

自分の容姿にコンプレックスを持っているフィオナは、人前に出るのが苦手だ。通り過ぎる人達

が、自分のことを好奇の目で見ているような気がするからだ。だから、フードをしつかりと被って出来るだけ人目を避けていた。しかし、隠していると暴きたくなるのが人の性で、フィオナのそういう行動が更に人の好奇心を呼び起こすのだが、本人はそれに気付いていなかった。

ぎゅつと買い物籠の取っ手を握りしめ、身を縮こまらせて歩く。

早く終わらせて安全地帯に帰ろう。

そう思い、早々に用事を済ませたけれど、帰る途中で急に眩暈を覚え、道の端に座り込んでしまった。

フィオナは小さい頃から慢性的な貧血を患っており、時々思い出したようにクラクラして座り込んでしまう。病気がちだったという実の母に似たのだろう。そのせいで父や妹はフィオナに甘かった。今の母も気にかけてくれるが、父や妹のように過剰反応は示さない。フィオナとしては、母くらいの方が助かるのだが。

(よりによって外で貧血になるなんて……)

一刻も早く家に帰りたいのに、眩暈がひどくて動けない。仕方ないので、当分ここでじつとしていよう。少し経てば回復するはずだ。

そう心を決めたところで、自身に影が落ちたのに気付いた。

「……どうした、具合が悪いのか」

「……？」

フィオナがそろそろと顔を上げると、黒い何かが見界を埋めつくした。

その正体は、黒髪黒目で日に焼けた肌をした青年だった。落ち着いた雰囲気醸し出して、問いかける声も静かだった。けれど聞き取りづらいわけではない。

夏の日差しの中、黒い上着とズボンを身に着けている男は、上半身に赤い懸章けんしょうをかけていた。そこに描かれている盾の紋章を見て、フィオナはほっとした。この街の警備団の紋章だ。見回りの最中に具合が悪そうに座り込んでいるフィオナを見て、声をかけてくれたのだろう。

「すみません、貧血で……。あの、放つといてくれて構いませんので。そのうち治ります」

街を守る仕事だろう警備団の手を煩わづらわせるのも申し訳ないと思い、フィオナはそう返した。具合が悪いせいで弱々しい声しか出ず、ちゃんと聞こえただろうかと不安になる。

「今日は暑い。そんな中、具合が悪い者を外に放置するのは気が咎とがめる。家まで送ろう。どこだ？」
青年は端的に問うてくる。軍人の見本みたいな話し方だ。

「い、いえっ。そんな、悪いですから」

「心配いらぬ。俺はこの後、休みでな。時間が空いているから、具合の悪い者を送り届ける程度のこと、何の問題もない」

「お休みなら余計に悪いです……！」

そういう問題ではないのだと、気付けば声を張り上げてしまっていた。人見知りする性分しょうぶんなので、小さい声になってしまうことが多いフィオナには珍しいことだ。そのことにも動揺して更にまごまごしていると、向こうの方から少女らしい高い声が響いた。

「ちょっと、そのあんた。うちの姉さんに何してんのよっ！」

「アイシス」

フィオナは驚いて小さく声を漏もらす。アイシスははずかずかと歩いてくるや否や、青年とフィオナの間にずっと割り込んだ。

「姉さんがなかなか帰って来ないから、様子を見に来たのよ。……またからかわれたのね。ほん」と男ってどうしようもないんだから！」

アイシスはそう勘違いをして怒っている。フィオナはちゃんと説明しようと、アイシスの黄色いワンピースの腰あたりを軽く摘つまんでそっと引いた。

「違うのよ、アイシス。この方は、具合が悪い私を気遣って声をかけて下さっただけで……」

「具合が悪いって……姉さん、大丈夫なの？ ああ、暑い中、買い物なんて行かせるんじゃないかなかったわ」

お願いだから、人の話を聞いてちょうだい。

フィオナは困り果ててしまった。

「あの、ごめんなさい。妹が……」

フィオナが身を縮めて謝ると、青年は特に気にした様子もなく、口を開く。

「気にしていない。家族の者が迎えに来たようだが、女性では連れ帰るのにも苦勞するだろう。よければ手を貸すが」

青年がちらりとアイシスを見ると、アイシスは少し考え込んだ後、頷うなずいた。

「確かに私一人では厳しいわ。手伝って下さい」

「了解した」

青年はあつさり頷くと、フィオナの横にすつとしゃがみこんだ。

なんだろうときよんとした瞬間、体がふわりと浮かび上がった。

「さて、家はどちらにある？」

「なにも抱えなくても……」

「暑い日差しの下での貧血を甘く見てはいけない。もしかすると熱中症かもしれない」

予想外の出来事に、石のように硬直している姉に同情しつつ、アイシスは頬を引きつらせた。

しかし、思ったより朴念仁らしき青年は、ややずれたことを言う。

「……こつちです」

なんだか説明するのも面倒になったアイシスは、先に立って青年を誘導する。

(ひいひい、いやああ、恥ずかしいひいひいっ)

一方、フィオナは顔を赤くして、内心でもだえまくっていた。

*

「これはこれは、ロベルト殿ではないですか！ 娘を助けていただき、誠にありがとうございます！」

フィオナとアイシスの父であるノルマンは、青年に抱えられて帰って来た娘を見て、最初は驚愕

していたが、ハッと我に返って頭を下げた。

「どうやら父は、この青年を知っているらしい。」

「父さん、この人を知ってるの？」

アイシスの問いに、ノルマンは頷く。

「知ってるも何も、警備団の副団長様じゃないか！ ロベルト・アスレイル殿だよ」

「ええ!? じゃあこの人が、あの噂の『鉄仮面』……むぐっ」

「これ、アイシス！ なんて失礼な口を！」

ノルマンが慌ててアイシスの口を手で塞ぐ。冷や汗をかきながら、ノルマンはゆっくりと青年を振り返る。

「はは……すみません、ロベルト殿。娘はその……時々口が暴走しまして」

「構わん。言われ慣れている。それより、もう一人の娘御はどちらに運ばよろしいか？ 具合が

悪いのだから、早く休ませなくては」

「ああつ、そうでした！ 申し訳ありませんが、こちらまでお願い出来ますか。私はこの通り、膝の調子が悪いもので」

ノルマンは左膝を痛めている。かろうじて杖をつかずに歩けるが、人を運べる程ではないのだ。

ノルマンの案内でロベルトは、フィオナを自室まで運んでくれた。アイシスが言ったように、先程から『鉄仮面』のごとく表情が動かない。

恥ずかしさと居たたまれなさを放心気味だったフィオナだが、フィオナをベッドに下ろすや否や、さつさと出口に向かうロベルトを、慌てて呼び止める。

「あ、あの！」

「……？」

わずかに振り向くロベルト。

フィオナはありつたけの勇気を振り絞り、必死に頭を下げた。

「ありがとうございます……」

「お大事に」

ロベルトはそれだけ返すと、ノルマンとともに階下に下りていった。

閉まった扉を見つめていたフィオナは顔を赤くし、ばすつと枕に倒れ込んで頭を抱えた。助けてくれて感謝しているが、往來で知らない男の人に運ばれた事実はかなり恥ずかしい。当分顔を上げられそうになかった。

あんな所で座り込んでいてごめんなさい……！

どうせ運ぶのなら、フィオナみたいな醜女より、アイシスみたいな美少女の方が良かっただろうに、嫌な顔一つせずに運んでくれたのだ。

なんて良い人！

(……あの方が、“鉄仮面”。でも、噂って当てにならないのね)

警備団副団長のことは、噂好きな同年代の女友達から聞いている。

団長であるハーシエルの乳兄弟。ハーシエルより剣の腕が立つにもかかわらず、物静かで常にハーシエルを立てるため、絶大な信頼を得ているとか。更に、本人の性格の良さも相まって、部下に慕

われている。ハーシエルを陰から支える有能な副官だと評判だ。ここまでは良い話なのだが——その後が続くのが、寡黙^{かもく}であまり表情を表に出さないせいで、妙な迫力があって恐ろしいという話だ。そのため、たいがい初対面の女性や子供には怖がられるらしく、ついたあだ名が“鉄仮面”。字面^{じづら}の通り、その表情は金属のように冷たいという話だったが……

(別に怖くはないし、むしろ親切で優しくかったと思うのだけ)

噂って本当に信用ならない。

フィオナも街の者の間で“目隠し姫”などと呼ばれているので、そういった噂に左右されるのは好きではない。似たような、あだ名被害者として同情してしまう。

いや、それはどうでもいい。とにかく、お世話になったのだから、今度会ったらお礼をしよう。

フィオナは貧血がおさまるようにと掛け布団にくるまる。

そして、お礼の内容を考えながら、目を閉じた。

*

ロベルトに助けられた日から三日後。

フィオナはこれまでの人生で最大の難関を前にしていた。

緊張のあまり震えながら、アップルパイの入った籠^{かご}を最後のよすがのように握りしめ、門を睨みつける。その隣では、アイシスが呆れた顔をしていた。

「姉さん、そんなに怖いんなら、私が一人で行ってくるわよ？」

「だ、ただ駄目よ、アイシス。お礼なんだから、自分で言わなくちゃっ」
嘸みながらも反論する。

父にも直接礼を言えと言われているし、何よりフィオナ自身がそうしなくては気が済まない。ただ、とても一人ではここに来られそうになかったので、アイシスについてきてもらったのだ。

そういうわけで、警備団の門前にこうして立っている。

黒い鉄柵の門の向こうにある立派な白い石造りの建物が、警備団の本舎だ。他にもこの敷地には、修練場と馬屋、宿直用の建物があるらしい。確かに見回してみれば、それくらいあってもおかしくないくらいには広い。

門番に訪ねた目的を話すと、少し待つように言われた。二人いるうちの一人が本舎に確認を取りに行き、しばらくして戻ってくる。

「お会いになるそうです。どうぞこちらへ」

「あ、ああありがとうございます」

「ありがとうございます」

アイシスはガチガチな返事をするフィオナを、しっかりとよと言わんばかりに軽く肘で小突きながら、姉の態度をごまかすように笑顔をとり繕って礼を言う。綺麗な少女の花のような笑みに、門番の男は「いえいえ」と眉尻を下げた。

対人恐怖症なフィオナには、人の多い警備団の本舎はとても恐ろしい場所に見えた。まるで悪魔の根城か、竜の巣穴のようである。

それでもなんとか震える足で前に進み、門番の案内で副団長の執務室にたどり着いた。副団長は、警備団に届く書類や手紙を適切な者に振り分けたり、書類の作成や手紙の返信といった、判断を必要とする事務仕事が多いので、別に部屋を与えられているらしい。これは、廊下を歩きながら門番がアイシスに語ってくれたことだ。

(……門番さん、いくらアイシスが綺麗だからって、鼻の下を伸ばしすぎです)

あまりに露骨なので、姉としてはこの後アイシスが迫られるのではないかと少し心配になる。

「ロベルトさん、お客様をお連れしました」

「入ってくれ」

木製の分厚い扉の向こうから、抑揚のない声が入室を促す。

(わあ……)

一步入った執務室の様子にフィオナは圧倒された。

奥には重厚な造りのデスクがあり、そこに書類の山に埋もれるようにしてロベルトがいた。部屋の中には柵がたくさん並んでいる。ある柵には書類の束が分類されて置かれており、別の柵には本が詰めこまれていた。更に、その手前に置かれた細長いテーブルの上には、書類が山を築いている。そして、団員の証である懸章をかけた少年が一人、書類の山の間を行ったり来たりしていた。

「では、ロベルトさん。俺はこれで」

「ああ、ご苦労だった」

フィオナとアイシスを残し、門番が去ると、ロベルトはようやく書類から顔を上げた。

「すまないな、ご婦人方に立ち話をさせてしまうが……。さて、用件を伺おう」

フィオナはたちまち罪悪感に襲われた。

「すみません、こちらの都合で急に押しつけてきてしまつて。お忙しいのでしたら、後日改めて参りますが……」

「いや、ちょうど息抜きをしたかつたところだ。気にしなくていい。——ハンス、少し休んでいろ」
「分かりました」

ちよこちよこ動いていた背の高い赤毛の少年は、一つ返事をする、すつと部屋の隅に移動した。ますます申し訳なくなったフィオナは、緊張が悪化してふるふる震えてしまう。しかし、勇気を出して手にした籠をずいと差し出した。

「この間は、助けていただいてありがとうございました。お、お礼にお菓子を焼いたんです。どうかお納め下さい！」

「……姉さん。お納め下さいって……」

後ろでアイシスがぼそりと呟くが、フィオナは必死過ぎてそれどころではなかった。部屋の隅からブツと噴き出した音が聞こえた気がしたが、きつと気のせいだろう。

ロベルトはやや驚いた様子で籠を見つめ、少ししてから受け取った。

「ありがとうございます。……まさかこのためにわざわざここへ？」

「はっ、はい。あの、お礼は自分でするものですから……」

フィオナは恐々と首をすくめつつ、無意識にじりじりと後ろに下がった。伸ばした前髪の間で、ロベルトが片眉を上げたのが見えた。一気に青ざめる。

「も、もしかして、ご迷惑でしたか……？ それなら遠慮なく暖炉の種火にでもして下さいっ」

「いや、そんなことはないが……」

わずかに苦笑らしきものを浮かべたロベルトは、呆れたように返す。

「俺が怖いのなら、わざわざ礼をしに来なくてもよかったのにと思っただけだ」

その言葉の意味を理解した途端、慌ててしまった。フィオナが人から距離を取りたがるのも、無意識に後ずさる癖があるのも、単に人と話すのが苦手なだけで、別にロベルトが怖いからではない。

「ち、違いますっ。私、その、怖くなんて……」

困り過ぎて泣きそうな声が出てきた。何て言おう。お礼を言いに来たのに、逆に相手を傷つけてどうする。

「そうそう、違いますよ、副団長さん。姉さんは人見知りをしているだけです」

アイシスが苦笑混じりに助け舟を出してくれたので、フィオナはそれに後押しされて続けた。

「妹の言う通りです。私、人の多い所は苦手……。それは確かに怖いんですけど、副団長さんが怖いわけではなくて……っ」

なんか駄目だ。言いたいことが口に出来ない。

「ううっ、ごめんなさい！」

耐えきれなくなつて、謝るとすぐに妹の後ろに逃げ込んだ。

帰りたい帰りたい帰りたい。こんな所まで来てごめんなさいいっつ。

心の中では、謝罪の念と後悔の嵐が吹き荒れている。

でも、これだけは言おう。同じあだ名被害者であるロベルトに、どうしてもエールを送りたい。

「あの、私も、その、街の人になつたあだ名をつけられていて……。だからその、副団長さんも大変でしょうけど、頑張つて下さい……」

「……?」

フィオナが消え入りそうな声でそう言うと、ロベルトは怪訝そうに眉を寄せた。彼が何か言おうと口を開きかけた途端、フィオナ達の背後で扉が前触れなく開く。

「おーい、ロベルト！ 来月の見回りのスケジュールで相談が……。つと、おや、お客さんか」
ひぎゃっ！

フィオナは飛び上がる程驚いて、妹の腕にしがみついた。

すると、アイシスの喜色を含んだ声が響く。

「……ハーシエル様！」

「へ？」

フィオナは恐る恐る扉の方を振り返つた。すると、そこには金髪碧眼の背の高い美青年が立っていた。青い糸で縁飾りや刺繍が施された白い上着と黒いズボン姿で、上半身には赤い懸章をかけている。そして、腰には警備団の紋章が刻まれた長剣を下げていた。

(き、キラキラしてる……っ)

フィオナはますます怯えて、アイシスの背中に隠れる。

怖い。なにこの絵本の中の王子様みたいな人。眩しくて同室にいるのも居たたまれなくなる。

「おや、僕のことを知ってるのかい？」

白い歯をきらりと輝かせ、笑みを浮かべるハーシエルに、アイシスは何度も頷く。

「ええ、もちろんです！ この街でハーシエル様のことを存じ上げない娘なんて一人もいませんわ。申し遅れました。私、アイシス・トレーズと申します。それからこちらは、姉のフィオナ・トレーズです」

「ああ、トレーズ商会の所の娘さんか。しかもその姉つてことは……。へえ。じゃあ、君が噂の『目隠し姫』？ 本当に目を隠してるんだなあ」

じろじろと見られて、ますます居心地が悪くなつて縮こまる。

「わ、私のような醜い者は、隠れている方がいいのです。領主様のご子息の目にさらすものではありませんっ」

フィオナは小声ながらも、そうきつぱりと言い切つた。

うう。自分で言つた言葉だけど、ちよつと泣きそう。

フィオナがしょんぼりしたのを見て、アイシスのまとう空気が厳しいものになる。

「恐れながら申し上げます、ハーシエル様。女性の見た目について軽々しく口にするものではありません」

綺麗な少女に睨まれて、ハーシエルは頭をかいた。

「これはこれは。申し訳ありませんでした、ご婦人方。噂に翻弄されるなど、警備をあずかる者として恥ずべき行為でしたね。許していただけるとありがたいのですが……」

ちらつとハーシエルが窺うようにこちらを見るので、フィオナはぶんぶんと首を縦に振った。アイシスも睨むのをやめて、穏やかに微笑む。

「姉は許すそうですわ。もちろん、私も」

「それはありがたい」

ハーシエルは胸に手を当て、気障つたらしい礼をした。

フィオナは更に恐縮して、あわあわとアイシスを盾にする。どうせアイシスはハーシエルに見惚れているから、盾にされても気にしないだろう。

「あ、あの。お忙しいようなので、この辺で失礼します。本当にありがとうございました。……行きましょ、アイシス」

「え？ ええ……。お邪魔しました。ハーシエル様、お会い出来て光栄でした」

「こちらこそ、麗しいレディー」

やや不満そうだったが、素直に頷いたアイシスに、ハーシエルは片目をつぶってみせた。途端にアイシスはぼつと頬を赤らめる。

フィオナは夢でも見ているかのようにぼんやりするアイシスを引っ張り、そそくさと部屋を後にした。

*

「隅に置けないなあ、ロベルト。いつの間にトレーズ商会の姉妹と知り合ったんだい？」

「三日ほど前に、街で具合が悪そうにしていたので、家まで送り届けただけだ」

ロベルトとハーシエルは乳兄弟であり親友でもあるので、公の場以外では敬語を使わずに話す。そうしないとハーシエルが嫌がるのだ。

ロベルトは、先程フィオナが渡してくれた籠をちらりと見た。

そういえば、菓子と言っていたがどんなものだろう。ずっと書類仕事をしていたので、ちょうど糖分が欲しいと思っていたところだ。籠の中身を見ると、黄色い布の包みと走り書きされたメモが入っていた。

「小腹が空いた折にでもお召し上がり下さい。甘いものが苦手でしたら、どなたかに差し上げて下さい」

綺麗な字でそう書かれている。いったい何が入っているのかと布の包みを開ければ、両手で抱える程の大きさの丸い籠と同じサイズのアップルパイが入っていた。それも五枚も。

「へえ、ちなみにどっちを助けたんだい？」

ハーシエルが興味津々に聞いてくるのを、ロベルトはどうしてそんなことを訊くのかというように、やや首を傾げて見た。

「姉の方だ。——ああ、ハンス、茶を用意してくれないか。君の分も」

「分かりました、副団長」

「僕の分もよろしくね」

「……かしこまりました、団長」

そう事務的に返事をし、ハンスが執務室を出ていく。

「なんだ、目隠し姫の方が。てつきり、春の女神のようだと言われている妹の方かと思ったよ」

「その『目隠し姫』というのはなんだ？ それに、そんなにあの姉妹は有名なのか？」

ロベルトの問いに、ハーシエルは頷く。

「有名なども。姉の方は、あまりの醜さに前髪を伸ばして顔を隠しているため、『目隠し姫』と揶揄されているらしい。反対に妹の方は、その可憐な容姿のために求婚者が後を絶たないとか。妹に近付くために姉に見合い話を持っていく輩もいるようで、父親や妹がそれをはねのけているらしい。極めて姉妹仲が良いようだね」

ロベルトは先程の二人の様子を思い出した。

フードを目深に被り、前髪で鼻の上まで隠した姉が、おどおどと妹に寄りそっている様子を。そして目隠し姫と呼んだハーシエルに、妹が憤然と抗議する様子を。

街の者達の口さがない言いようや、知っていてあだ名を口にするハーシエルの言葉を聞くと同情が湧いてくる。最初は、他の人間と同様に、自分の無愛想な態度に怯えているのだと思っていたが、それが極度の人見知りのせいだったと知れば尚更だ。それに、よくよく考えてみれば、心根のいい

娘だ。怖がついていても礼をきちんと言ひ、後日こうして改めて礼にやって来るのだから。更に言えば、自分よりもハーシエルに声をかけられた時の方が怯えていたのが、小気味よかったのもある。普段なら逆だ。

「ハーシエル、女性をそんなあだ名で呼んでやるな。仮にも女扱いに長けていると言うなら、余計にな」

「仮にもってなんだい、ロベルト。本当のことだよ」

にやつと笑うハーシエル。

その傲岸不遜な、けれど女性に騒がれる綺麗な顔立ちを一瞥して、ロベルトは溜息をつく。実際、女にもてるので反論出来ない。

そこへ、ハンスが茶器と皿を載せた盆を持って戻って来た。盆をロベルトの机に置くと、すぐにまた出て行き、今度は椅子を一脚持つてくる。

「どうぞ、団長」

「ありがとう、ハンス」

ハーシエルは礼を言つて椅子に座ると、ハンスの注いでくれた茶をおいしそうに飲んだ。

一方、ロベルトはハンスが持つてきた皿にアップルパイを載せ、それぞれに配る。そして、茶を飲んでからアップルパイを口に運ぶと、驚きのあまり目を丸くした。

表情が読みとりにくい上司の珍しい変化に、ハンスは警戒してロベルトを凝視する。

「どうかしましたか、副団長。まさか毒でも入って……」

「……美味い」

「鉄の表情が変わるくらい、おいしいんですか？」

心配は杞憂に終わったものの、今度は思わず口から失礼な言葉がついて出るくらいにハンスは驚いた。ロベルトはあまり味に頓着しないタイプなのだ。

ロベルトはあえて聞き流し、顎をしゃくる。

「食べてみる」

「はいっ。では失礼して」

立ったまま、むしゃりと遠慮なくがつついたハンスは、その姿勢のままびたりと動きを止めた。

青い目に涙が浮かぶ。

「お、おいしいっ！」

そしてもの凄い勢いで完食すると、感極まったように騒ぎ立てる。

「なんなんですよ、これは！ こんなおいしいパイ、初めてですよっ！ 風見鳥亭のものよりおいし

いだなんて！」

風見鳥亭というのは、警備団本舎から近い場所にあり、地元でもおいしいと評判の食堂だ。警備団の敷地内には食堂がないので、ほとんどの団員が愛用している。

「本当だ。これは美味い。姉がこの技量なら、妹殿もさぞかし上手なのだろうな」

ハーシエルも驚いた顔をして、何やら一人うんうんと頷いている。

先程からやたら姉妹の話をするハーシエルを、ロベルトはうろんな顔で見やる。

「お前、もしや……」

「なんだい、ロベルト。綺麗な女性を見かけたら、声をかけるものだろう」

つまり、妹の方にちよつかいをかける気満々らしい。

まあ、彼は一週間前に恋人と別れたはずだから、障害はないだろうが……

「子ども相手に……」

「彼女は十六だよ。結婚適齢期。問題ない」

そう言って、楽しげに笑うハーシエル。

「ほどほどにしておけよ。トレーズ商会を怒らせると、領主家が困るだろう」

「分かってるよ」

「……本当に分かっているのだから」

ロベルトはアップルパイを咀嚼しながら、アイシスがハーシエルの魔の手から逃げ切れることを祈った。

が、恐らく無駄なのだろう。ハーシエルを見た時の彼女の態度は、完全に恋している娘そのものだったから。

*

「きゃあああ、姉さん姉さん！ 聞いて聞いてーっ！」

黄色い悲鳴を上げながら、どたばたと階段を駆け上がったアイシスは、フィオナの部屋の扉を勢いよく開けた。

(また、ハーシエル様のことかしら)

フィオナはそう予想して、裁縫の手を止めると、体ごと扉の方を向く。

今日はハンカチに興味の刺繍をしていて、あと少しで終わるところだった。

焦げ茶色をベースにしたフィオナの部屋には、ベッドと机と椅子、それから本棚に筆筒、クロゼットが置いてある。あとは、あちこちに花や、フィオナが自分で作った小物が飾られていて、女性らしい雰囲気醸し出していた。ここはフィオナの安全地帯であり、憩いの空間だ。

アイシスもそれなりに料理や裁縫は出来るが、フィオナ程ではない。だから、時々アイシスに頼まれてぬいぐるみや小物を作ったり、アイシスの誕生日にはフィオナお手製の服やアクセサリーをプレゼントしていた。今は夏服を頼まれていて、部屋の隅には、作りかけのワンピースをかけたトルソーがある。

アイシスはフィオナの作る服のことを、その辺の仕立屋よりセンスがあつて素敵だと言ってくれる。それが嬉しくて、ついつい手をかけて作ってしまうのだ。それに可愛らしい妹に可愛らしい服を着て欲しいという姉心もある。……ややシスコン気味なのは自分でもよく分かつていた。

「これ見て！ ハーシエル様がくださったの！ 今度、一緒にお食事しませんか？ ですって。いやあああ！」

部屋に入ってきてフィオナに花束を見せた後、アイシスは興奮のあまりその花束を抱きしめて、

身をよじって叫ぶ。

嬉しいのか嫌なのかどっちなんだろう。

「花をくださったって……まさかここまでいらしたの？」

「ええ！ 店にわざわざいらして、花束を片手にデートの申し込みをして下さったのよ。素敵だよ。今日は嬉しすぎて眠れないっ」

まあ、それだけ興奮していれば確かに眠れないだろう。

きやあきやあと浮かれているアイシスに、フィオナは確認をとる。

「それで、いつデートに行くの？」

「明後日よ！」

「良かったわね、アイシス」

「うん！ ありがとう、姉さん！」

アイシスが喜ぶのはフィオナも嬉しいが、不安も残る。なにせ、街で浮名を流しているあのハーシエルが相手だ。平民の娘との恋愛はただの遊びと考えていたら、アイシスが傷つく可能性がある。

だが、貴族の次男という高額の花へ、遠くから思慕を募らせていたアイシスに、ハーシエルが目をとめたのは幸運なことだ。

(大丈夫かしら……)

もし何か悪いことが起きてても、慰められるように自分も覚悟しておこう。

(明後日なら、コサージュくらいは作れるかしら)

アイシスのことだ、めいっばいおめかししてデートに臨むだろう。そんな妹を応援したい。フィオナの頭の中には、アイシスに似合う色のコサージュが浮かび始めていた。

裁縫箱や布地や端切れを入れた箱を覗き、考える。布は足りているけれど、糸と飾りが足りない。どうせなら飾りボタンをつけた花のコサージュにしたい。

「ちよつと買い物に行つてくるわね」

「えっ！」

くるくると回つて喜びを体全体で示していたアイシスは、ぴたつと動きを止める。

「こないだ貧血になったばかりでしょ。私も一緒に行こうか？」

「大丈夫よ。今日は調子が良いから」

穏やかに言うと、しばらくフィオナの顔をじつと見てから、アイシスは頷いた。

「うん、確かに顔色はいいみたいね。それなら私は家にいるわ。今日は私が夕飯の当番だから」

「留守番よろしくね」

アイシスにそう声をかけると、フィオナは緑の外套を着て、フードを目深に被り、手に買い物籠と財布を持った。

たまに、フィオナが見本として作った品を見た客がそのまま買い取ることもあるし、その見本品を参考にして布を買うことも多いため、両親はフィオナが物作りに金をかけるのを奨励していた。その分、フィオナにもお小遣いが入るし、ありがたいことだ。

準備を整えたフィオナは、トレーズ商会の隣に建つ自宅を出て街に向かった。

*

午後三時過ぎ。

夏の日差しが少し穏やかになってきた時分、ロベルトは街の見回りに出ている。

本来なら副団長のする仕事ではないが、ロベルトは自分の目で直接街を見て回るようにしていた。普段の状況を知っていれば、緊急時にすぐ対応ができるからだ。

(しかし、暑いな……)

色の明るい服が苦手なので、黒や灰色をよく着ているのだが、暗い色は熱がとどまりやすいし、見た目にも夏向きではないとつくづく思う。

内心で、こんな日にハンカチを執務室の鞆の中に忘れてきてしまった自分の失態を呪う。

しかも、つい先ほど、メイנסトリートで引ったくりを一人捕まえた時に立ち回りを演じたため、とても暑い。汗だけで気持ち悪いくらいだ。

引ったくりから取り返した鞆は盗まれた女性に返し、犯人は近くを通りかかった部下に引き渡したので一段落したのだが……

「はあ……」

その時のことを思い出すと、溜息が出る。

被害者の女性がロベルトを見た時のあの顔ときたら。鞆を取り返して以後気を付けるようにと注

意するロベルトに、彼女は笑顔を取り繕い損ねたのか顔を引きつらせ、話が終わるや否や札を言つてそそくさと帰っていったのだ。

——何故だ。

ロベルトには訳が分からない。

小さい頃から、普通に話しかけているだけなのに、何故か相手に異様に怖がられるのだ。以前ハーシエルが、無表情で淡々と語るのが怪談話をしているみたいで恐ろしいと言っていたが、ロベルトにはそんなつもりは更々ない。それなのに女は強張った顔をし、子どもは急に泣き始める。お陰でロベルトは女や子どもが苦手である。その辺を歩いてきた犬にまで怯えられた時は、本気でどうしようかと悩んだものだ。

その一方で、子どもを除いた男連中には、女に媚びないところが格好良いなどと慕われる。女性には努めて優しく声をかけているつもりで、ロベルトからすれば、そんな風に言われるのは心外だ。ハーシエルと比べれば、確かにそう見えるのかもしれないが。

そんなことを考えながら見回りを続行していると、ふとロベルトは向こう側から歩いてくる少女に気付いて足を止めた。

緑色の外套のフードを目深に被った少女。前髪のせいで、顔は鼻から下しか見えない。道の端を歩く少女は、どこか浮かれた様子で足取りも軽やかだ。

あの娘は、確か——

「アップルパイの……」

思わず名前より先にそちらを思い出したのは、致し方ないだろう。それだけあのアップルパイは、おいしかった。

ロベルトのその呟きを拾ったのか、フィオナはきよりと周りを見回した。そして、ロベルトを認めると、ぎよつとしたように後ずさる。

「ふ、副団長さん……」

フィオナの小さな唇が、そつと言葉を紡ぐ。

小さいが、綺麗な声をしている。一般的に背の低い娘の方が良いという価値観があるが、フィオナは若干背が高めである。加えて、顔が醜いから余計に人々は騒ぐのだろうか？ しかし、目が隠れているとはいえ、噂ほどとは思えない。

ハーシエルの話を思い出して、ついまじまじとフィオナを観察してしまう。そのせいで、可哀想にフィオナはすっかり顔を赤くして縮こまってしまった。そういえば人見知りするのだったと、ロベルトが思い出した時にはもう遅い。

「あ、あの、私、何かしてしまいましたか……？」

小さく、泣きだしそうな声でフィオナは問う。

警備団員に睨まれれば、一般人は何かしたのかと不安に思うだろう。

「いや、すまない。何でもない。……あのアップルパイ、おいしかった」

ロベルトは少し焦った拳句、そんなことしか付け足せなかった。

しかし、フィオナにはそれで十分だったらしい。見るからに体から緊張が抜け、ほつと息を吐く。

「お口にあつて良かったです。副団長さんは見回りですか……？」

ぼぼそと囁くフィオナ。首を傾げる動作に合わせ、緩やかにカーブを描く黒髪が揺れる。髪の毛もあつて、わずかに覗く肌の白さが際立つて見えた。ロベルトも黒髪だが、肌は日に焼けているので、絶対にこんな風には見えないと思う。

「そうだ」

「副団長さんみたいな偉いお立場でも、見回りされるんですね」

「本来はする必要はないが、俺は好きで自分からしている」

「そうなんですか。副団長さんがご立派な方という噂は、本当なんですね。そんな方が見回りをし下されば街の人達も安心しますし、私も同じ街の者としても嬉しいです」

打算も何も無い、心からそう思っているというような言葉だ。

「俺が見回りをすると、何故喜ぶ？ 誰が見回っても同じだろう？」

ロベルトの問いに、フィオナは首を振る。

「いいえ。同じではないと思います。偉い方のそういう姿を見ると、ちゃんと街のことを考えて下さっているように思えますから」

「そ、そうか……」

真つ直ぐな言葉に、柄にもなく照れてしまう。

それならば、ハーシエルにも見回りをしてもらった方が効果的かもしれない。だが、あいつが見回りをすると、女に囲まれて仕事にならないから邪魔か。

「……買い物か？」

特に口にすることを思いつかず、なんとなく買い物籠を見て問いかける。いや、買い物籠を持っている時点で買い物しか用事はないのだろうか。

ロベルトの端的な問いに、フィオナは気分を害した様子もなく頷く。

「……はい。あの、ハーシエル様が妹と食事に行くそうなので、妹のために、コサージュを作ろうかと」

「ハーシエルが？」

「はい」

その材料の買い出しのようだが、問題はそこではない。あの男、動くにしても早すぎやしないか。あれから二日しか経っていないのに。

「妹はとても喜んでいて。……でも、少し心配です」

フィオナはやや視線を落とした。

何が心配なのかは、言わずとも分かった。ハーシエルの浮名など街の者なら誰でも知っていよう。「そうだな。……俺も心配だ」

主に、いつかハーシエルが背後から誰かに刺されないかが。

「しかし、君は器用だな。あんな美味い菓子を作る上に、コサージュまで作るとは」

「私は、家の手伝いをするくらいしか能がありませんので……。私の家は布地商をしていますから、売る時の見本用に、ハンカチや服、それにコサージュなどのアクセサリを作ります。それで自

然と覚えただけです」

どこか困ったようにフィオナは言う。謙遜しているというより、本気でそう思っている感じだ。

「見本になるものを作れるのなら、大したものだ」

「……ありがとうございます」

恐縮した様子で身を縮めるフィオナ。褒められ慣れていないのだろうか。

「あ、あの。これ、よかったら使って下さい……」

少し逡巡して、籠から取り出した物をフィオナが差し出す。

「汗を、その、たくさんかかれていますから……」

見れば、白い木綿のハンカチだ。オウムを模したと思われる、見事な鳥の刺繍が緑の糸で施されているのが見えた。

ロベルトが思わずそれに見惚れていると、差し出したままのフィオナの手がぶるぶる震えだした。

「だ、大丈夫です。清潔です。まだ使ってません」

途切れがちな言葉。どうやらなかなか受け取らないのを、清潔かどうか疑っているからだと思っ
たらしい。

このままでは傷付くだろうと思い、ロベルトはハンカチを受け取る。四角に折りたたまれたそれを広げると、オウムの全体像が露わになった。

「見事な刺繍だな」

「趣味で作ったものなので、そんな褒められるものでは……。でもよろしかったら、そのまま使っ

ていただいで結構です」

「君が作ったのか？」

「え、ええ……」

フィオナは籠を握りしめる。

これはますますすごい。この間の菓子もそうだが、裁縫の腕もプロ顔負けのようだ。

感心していると、急に俯いていたフィオナが顔を上げた。

「す、すみません。出過ぎた真似を……。副団長さんでしたら、きっと素敵なお相手がいらっしや
いますでしょうに、こんな不細工な者から物を贈られるなんて不快でしょう。気付かなくてすみま
せん。や、やっぱり返して下さい」

伸びてきた手を避け、思わずハンカチを持った手を上げてしまう。

「迷惑に思った覚えはない。正直、もらえると助かる。ハンカチを忘れてきてしまったな。困って
いたんだ」

「……そうですか？」

やや疑わしげに問い、遠慮しなくていいというように続ける。

「お邪魔でしたら、暖炉にくべるなり、庭に埋めるなりお好きにして下さい」

「しないから安心しろ」

ロベルトはフィオナのその言葉に、思わず苦笑する。いくらロベルトが「鉄仮面」「冷たい」と
言われていても、そんなひどい真似はしない。

「これでも警備団の副団長なのだが……俺はそんなに極悪非道に見えるのか？」

つい疑問が口から出た。客観的にそうなのかと思っただけだが、問われた娘は仰天したように三歩ほど後ずさり、激しく首を横に振る。

「ごめんなさい！　そういうつもりで言ったんじゃない……。あの、大丈夫です。副団長さんは優しいと思いますっ」

その返答に、今度はロベルトが仰天した。

優しいなど、今まで女子どもには言われたことのない台詞だ。

「それならありがたい。あんまり周りに怖がられるのでな、そう見えるのかと思っていたんだ」

「そ、そうですか……」

ロベルトが怒ったわけではないと分かったのか、フィオナの様子が落ち着いていた。

「フィオナ殿、だったか？　ハーシエルと妹殿のことでは何かあったら、いつでも俺の所に相談に来るといい。あいつとは親しいから、たいていのことはアドバイス出来ると思う」

「……よろしいんですか？」

恐る恐る問い返すフィオナ。

なんだろう。あんまりびくびくこわごわしているの、だんだん周りを警戒している小ウサギのように見える。

「ああ。では、俺は見回りを再開するので、これで失礼する」

「あ、はい。お気遣いありがとうございます」

小さく会釈をし、ロベルトの横を通り抜けて歩いていくフィオナ。そのほっそりした後ろ姿を見送ってから、もらったハンカチで汗を拭いた。

も綿のハンカチから花の香りがして、どきつとした。なんとなく居心地の悪さを覚え、ごまかすようにハンカチをズボンのポケットに押しこんだ。ロベルトも男だ。女性が持ち歩くような良い香りのする物をもらうと、落ちつかない気分になってしまう。

(別に俺は悪いことはしてないぞ。まったく、なんなんだろうな……)

ぐしゃぐしゃと自分の頭をかき回しながら、この姿をハーシエルに見られたら笑われそうだと考えた。

*

「副団長、そのハンカチ、どうされたんですか？」

ロベルトは書類を書く手を止め、ハンズを見る。

ハンズは今年入ったばかりの新入りで、実家が商家で文字や数字に強いいため、書類仕事の手伝いをしてもらっている。警備団には、体を動かすのには長けていても、書類仕事は不得手な者が多いのでとても助かっていた。

「どうとはっ」

「昨日からやたらそれを見ているので、何かあるのかと思ひまして」

新人とはいえ、もう半年の付き合いだ。同室で仕事をしているのだから、ロベルトが普段と様子が違うとすぐに気付くのだろう。

ロベルトは微笑をしつつ、デスクの端に広げて置いてあるハンカチを見る。昨日、フィオナにもらったものだ。帰ってくるなり石鹸で洗って干し、乾いたものをデスクに置いて時々眺めていた。あまりにも刺繍が見事なので、何度見ても感心してしまう。

「昨日、見回りの時にフィオナ殿にお会いしてな。その時にもらったんだ」

「え、あのトレーズ商会の方ですか？ ええと、どっちですか？」

「姉の方だ」

「ああ、『目隠し姫』ですわね！」

ハンスのその反応に、ロベルトはたしなめるように言う。

「ハンス、女性のことをそんな風に呼ぶものではない」

「あ、すみません。つい」

ハンスは首をすくめて謝る。

「このハンカチは彼女の手製らしい」

「そうなんですか！ すごいなあ。パイ作りだけじゃなく、裁縫まで得意だなんて。これで器量好しなら引く手あまたでしょうに……」

噂を思ってたか、ハンスは不憫そうに呟く。

「でも、ブスは三日で慣れるって言いますし、家に帰ってあの料理を食べられるんなら、結婚する

のも悪くないかもしれませんね！」

あけっぴろげに言い切るハンスに、ロベルトは頭痛を覚えた。

「ハンス……。失礼だぞ」

「うっ、すみません！」

ハンスはまたもや首をすくめる。仕方ない奴だと思いつつ、ロベルトは昨日のフィオナとのやりとりを思い出し、口を開く。

「フィオナ殿の妹が、ハーシエルと食事に行くそうだ。もしフィオナ殿が来たら通してやってくれ。何かあったら相談に乗ると約束したのでな」

神妙にロベルトが言うと、ハンスは天を仰いだ。

「また一人、罪のない女性が団長の毒牙に……あんまりです、神様」

そして、気を取り直したように大きく頷く。

「分かりました。フィオナさんがいらっしやったらお通しします。……出来れば相談に来ないことをお祈りしますが」

「ああ……」

それにはロベルトも全くの同意見だった。

フィオナがアイシスのことで相談に来るということは、間違はなくハーシエルがアイシスにひどい振る舞いをしたということの意味する。

「俺、嫌ですよ。女性が泣きながら団長に会わせろって騒ぐ修羅場に立ち会うの」

新人で、まだ半年目なのに、ハンスは何度かそういう場面に居合わせていた。

「俺だつて嫌だ。しかも、俺の顔を見たら怖いと言つてますます泣くんぞ。やつてられん」

今度は、ハンスはロベルトへ憐れむような視線を向けた。

「……副団長、お気を強く持つて下さい。副団長がそういう感じの顔に生まれている以上、仕方ないと思います」

「……………ああ」

なんて失礼な奴だと思つたが、ハンスが真剣に励ましているのがわかつて、ぐっと文句をこらえたロベルトだった。

*

アイシスがハーシエルと食事に行く約束をした日。

明るい緑色のワンピースに、フィオナ特製のピンク色のコサージュをつけたアイシスが、迎えに来たハーシエルと出かけていくと、フィオナはほっと息を吐いた。

花を模したコサージュはアイシスにとてもよく似合っていたし、何よりアイシスの機嫌が最高潮に良いのは嬉しい。だが、なんとなくもやもやするのだ。きっと相手がハーシエルだからだろう。

大事な妹が傷つけられやしないかと、フィオナは気が気でない。両親も、アイシスがハーシエルとデートするのを聞いて渋い顔をしていた。ハーシエルの噂を知っているのだから、親としては心配

するのは当たり前である。

でも、これも一時の夢だと割り切つて、それで諦めがつけばいいとも父は言っていた。高嶺の花への恋を昇華させるには、これくらい必要だと。それに今のアイシスに言つても聞かないだろうから、とりあえず様子を見よう。

フィオナ達はそう示し合わせ、アイシスの好きにさせることにしたのだ。

「よいしょ……………」

フィオナはトレース商会の倉庫で、棚から木箱を抱え下ろす。

もやもやする分、働いて気を紛らわせようと思い、在庫の確認をしていた。中身を確認し、帳簿につけ、新しく入荷した品を箱に入れて保管すると、また帳簿につける。そういう作業の繰り返しだ。倉庫は涼しく、貧血になりやすいフィオナにも安全ということで、両親も倉庫整理なら任せてくれる。フィオナが対人恐怖症なのを理解しているので、店番はしなくていいと言われていた。見本品作りや家事もしているし、裏仕事を支えているから十分とのことだ。代わりに、人当たりの良いアイシスがよく店番をしていた。アイシスは、ノルマンやレティシアとともに、衣服を手作りする市井の婦人方や仕立屋、それから行商人、時折訪ねてくる領主家や貴族にも対応をしている。店を訪れても、市井の婦人達は必ず買い物をするわけではない。井戸端会議の場として集まっていることもあるのだ。そうした婦人達と雑談するのも、店員の勤めだった。フィオナがいる倉庫と売り場はつながっているので、その様子が時々見られた。

ちなみに、店には筒状の木箱や奥行きのある棚があり、そこにロール状に巻いた布を置いて幅一

メートルから販売している。客達は必要な分だけでもいいし、ロール一本分を買っていつでもいいため、便利だと評判だった。更に布の種類も多く、質も良いため、トレーズ商会はそれなりに繁盛していた。

だが、布はひよいひよい売れるものではない。だから家族三人でも店の運営は可能だが、ノルマンが膝を悪くしているので、季節の折々に出かける買い付けやその運搬などのために、男の従業員を三人雇っている。それ以外にも、清掃やトレーズ一家に用事が出来た時の店番、倉庫の商品の移動などもお願しているが、日常的な作業は一家で回っていた。

その日も、フィオナはいつも通り倉庫で働いていたが、アイシスが帰ってくるまで落ちつかなかった。

「すごく素敵だったわ、ハーシエル様。さりげなくエスコートして下さい、食事もおいしかったです、お話も楽しくて」

夕方、ハーシエルに家まで送られて帰ってきたアイシスは、フィオナの部屋で夢を見ているかのようにぼんやりしながら、ほうつと感嘆の息を吐いた。フィオナは椅子に座ったまま、幸せそうなアイシスを見る。

「……そ、それで？」

その後には何か大変なことがなかっただろうかという不安が胸をよぎる。

アイシスは急に頬を赤らめた。ふふつと口元を手で覆って笑う。

(なにになに、なんで急に赤くなるのっ。まさかハーシエル様に何かされたとか!?)

心臓が爆発しそうなほど落ちつかない。

「えへへー、こう、ね。騎士の礼みために、手の甲に口づけをして下さったのよ。物語みたいで素敵だったわ。うふふつ、しばらく手を洗えないわあ」

きやあきやあと騒ぐアイシス。

なんだ、手だけか。よかった。フィオナはほっとした。

だが、そう思ったのもつかの間、アイシスの爆弾発言が続いた。

「それからね、姉さん。今度は植物園の散策に行きましょうって言って下さったの！」

緑色の目をキラキラと輝かせ、アイシスは両手を握りしめて言う。

「え、い、いつ？」

フィオナは平静を装いつつも、内心でかなり動揺した。

メリーハドソンの西にある植物園といえば、恋人達のデートスポットで有名だ。他には夜景の見える高台や、東の森にある花畑散策も人気だが、植物園は其中でも少し上品なデートコースで、入口付近にはお茶を飲めるスペースもあるらしい。そこで注文したお茶を味わい、花々を眺めながらのんびりとデートを楽しむそうだ。

「一週間後よ！」

アイシスはうきうきと答える。

「あの、アイシス……。ハーシエル様とは、その、お付き合いすることになったの……？」

恐る恐る訊ねる。ここはつきり聞いておきたかった。

アイシスは愛らしい顔をぽっと赤く染め、目を潤ませて頷く。

「実は、そうなの。恋人にして下さるって」

フィオナは目を丸くした。

まさかデート一回目にして、付き合うことになるとは予想外だった。ハーシエルが女遊びの激しい人だというのは本当だったのか。

信じられない気持ちを通過すると、今度は不安な気持ちかもやもやと胸に湧き起こった。

「いいの？ アイシス」

「え？」

「だって、ハーシエル様の噂……」

心配を口にするフィオナを、アイシスは手を挙げて止めた。

「姉さん、それ以上は言わないで。私、ちゃんと分かっているから。もしかしたら遊びかもしれないけど、今は一緒に喜んで欲しいの」

アイシスはフィオナをじつと見つめ、にっこり微笑んだ。

分かっているのか。フィオナは安堵したが、胸の中では更にもやもやが膨れ上がった。あんな風に恋をしていた妹が、こうして思い人と結ばれたのだから、素敵なことのはずなのに。

しかし、アイシスは心配されることなく、共に喜びを分かち合うことを望んでいる。フィオナは一度もやもやする気持ちを脇に置いて、笑みを浮かべてみる。そうすると、何だか本心に嬉しいことのように思えてきた。

「おめでどう。良かったわね、アイシス！」

「ありがとう、姉さん！」

二人はそのまま勢いで手を取り合って、部屋の中をきやあきやあ跳び回り、この奇跡を喜びあつた。そうして存分に騒いだ後、アイシスが部屋に戻りフィオナ一人になると、またもやもやがやって来た。ベッドに腰かけ、小さな溜息を吐く。

（もしかして、静観するという選択は間違いだっただけかしら？ アイシスはハーシエル様と付き合いわないで、夢を見たままだった方が良かったんじゃないかしら？）

でも、幸福そうに微笑むアイシスを見ると、この考えは間違っているような気がしてくる。少なくとも、今のアイシスは、付き合わないでいた時よりも幸せなのだ。

何となく、フィオナの脳裏にロベルトの顔が浮かんだ。ハーシエルのことで相談があればいつでも来ていいと言ってくれていたのを思い出す。

（せめて、遊びか本気か、どちらかだけでも分らないかしら……）

そうしたら、このもやもや感も少しは治まりどころが見つかる気がするし、何より家族としての対応も取りやすい。乳兄弟の方なら、その辺りのことが少しは分かるかもしれない。

*

フィオナが訪ねてきたという知らせを聞いて、ロベルトは仰天した。